

1. メディアFDの枠組

—— 予備的なニーズ調査と研修プログラム提案から ——

山 地 弘 起 (メディア教育開発センター)

メディア活用に関するFD (以下、メディアFD) の枠組を求めるため、本共同研究の構成メンバーが98年度後期に行った予備的なニーズ調査と研修プログラム提案を整理した。調査回答は、主に看護学領域を中心に39件、研修プログラムは24名より提案された38件を対象とした。具体的な内容は資料1、2に掲げるとおり (フォーマットは佐賀啓男による)。

これらの資料をもとにしたメディアFDの枠組案を、図1に示す。

まず、本共同研究課題の焦点がメディア活用技能にあるとしても、それが埋め込まれる教育方法や個々の機関の環境整備の状況を見捨てることはできない。技術的及び組織的な環境や教育目標、方法によって、メディア活用のあり方も異なってくる一方、望まれるメディア活用のあり方が教育方法や環境整備のあり方にも影響していくはずであろう。

ところで、環境整備については、研究推進や事務運営などとも深く関連するところであるから、機関全体による意思決定が必要となる。次章で紹介するようなマルチメディア活用の先端事例などが、モデルケースとして参考になるとと思われる。

又、教育目標や教育方法に関しても、個々のコースレベルをこえて、学科・学部単位、さらには全学のカリキュラムレベルでとらえることも必要になる。個人レベルの適切な授業設計と教授スキルに加えて、評価手法や教材の共同開発などが求められよう。

さて、メディア活用の技能については、「つかう」「わかる」「つくる」の三側面からの理解が、当面有用である。すざまじいスピードで変容しているハードウェア、ソフトウェアの使い方は、基本的に自助努力で身につけていくしかない。その入門的なトレーニングのニーズは高いが、こうした研修は個別機関が応ずるよりも、いわゆる「パソコン教室」の方がはるかにいていいのである。研修としては、むしろ、新たな教育方法としての遠隔教育システムや教育ネットワークの利用法などが求められよう。

「わかる」という部分は、メディアを用いた教育についての理解である。「メディアで何ができるのか」「教育をどう変えられるのか」といったプライミング部分のほか、様々な実践事例 (メディア教材) の紹介と検討、さらに、メディアの原理的な問い直しや学習指導上の留意点、倫理的な注意事項などの吟味が求められよう。

「つくる」という部分は、メディア教材の制作やプレゼンテーションのデザインに関わる場所である。適切な教材のニーズは高いが、著作権の壁は大きく、自分で制作する時間的経済的コストも大きい。したがって、ここでは教材制作のスキルとともに、共同で制作を進める体制が求められよう。

最後に、研修形態も様々ありうる。集合研修だけでなく、公開授業やTV会議、ウェブサイトやメイリングリストを利用したものもありうる。また、先端的な試みを行う機関や教員のところ

にフィールドトリップを実施したり、特定の研修については専門学校やメーカーなどと連携することも考えられる。さらには、現地に常駐する、ないし、派遣されるメディア・コーディネーターなどがあれば、教育スタッフのサポートとともに、メディア活用のOJTも可能になるだろう。

謝辞 ニーズ把握の予備調査を実施してくださいました筑波大学 渡邊光雄先生、千葉大学 山本利江先生、愛媛大学 後藤幸子先生、安田女子大学 大作勝先生、熊本大学 梅田泉先生に感謝いたします。

<環境整備>

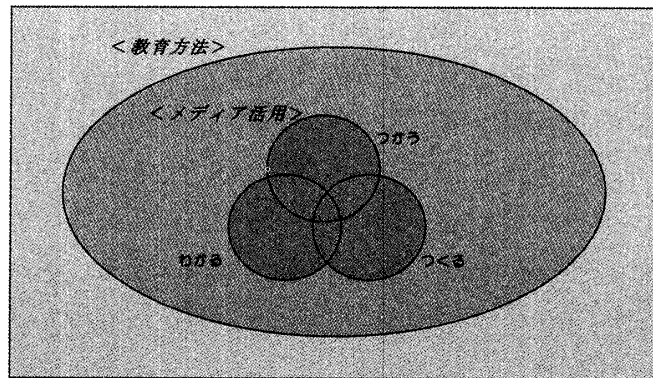


図1 メディアFDの枠組

資料1 予備的なニーズ調査の結果

●フォーマット

教員のメディア技能と教授法の向上のためのニーズに関するアンケート

以下、ご自身を含む範囲で、教員のメディア活用技能と教授法の向上のために、研修等の必要になることがらについてどのようなニーズがあるか、箇条書き形式で自由にお答えください。また、お答えのそれぞれの前の〔 〕内に、次のカテゴリー番号を付し、末尾の（ ）内に、ニーズのレベル（3：非常に高い、2：高い、1：中程度）の番号を付して下さい。

- 1：電子メールとインターネット利用の分野
- 2：それ以外のコンピュータ利用の分野
- 3：ビデオ利用の分野
- 4：テレビ会議（SCSなど）利用の分野
- 5：それ以外のメディア利用の分野
- 6：メディアにかかわらない資質向上の分野
- 7：これら以外の分野

お名前：_____ ご所属：_____ 専門分野：_____

ニーズのカテゴリー番号〔1～7〕、ニーズ内容の記述、ニーズのレベル（3～1）

〔 〕

〔 〕

〔 〕

●回答内容

専門分野 看護学（基礎看護）

- [3] ビデオ教材の活用法（効果と限界について） (3)
- [3] ビデオ教材の作成法 (2)
- [2] コンピュータを利用した教授法、（特に看護技術教育に関して） (1)
- [2] 教育用コンピュータソフト開発のプロセス (1)
- [2] コンピュータを利用した大学間での教育技術の共有 (2)
- [7] 視聴覚教材利用の前提となる人間の視覚や聴覚と認識との関係に関する原理 (3)

基礎看護学

- [5] 現在どのようなメディアが存在していて、どのような情報伝達方法が可能なのかについて (2)
- [5] 各メディアの具体的な活用例、コスト、必要な周辺機器、活用者の知識に対応したマニュアルや研修の有無、等の実際について (2)

看護学

- [1] 特にセキュリティ・システムについて (3)
- [4] これから先、遠隔地において、それぞれの領域の専門職による講義等が必要になると思うから (3)

成人看護学

- [4] テレビ会議で研究会etcができれば遠くの研究会に参加できるし時間的にも節約できる (2)

成人看護学

- [2 or 3] デジタルカメラとそれを用いたプレゼンテーション方法について (2)

成人看護学

- [3] VTR教材を効果的に授業で用いる方法について (2)

地域看護学

- [1] 効果的な利用方法についての知識・技術の習得 (2)
- [1] 最新情報の取得 (2)
- [3] 効果的な利用方法についての知識・技術の習得 (2)

小児看護

- [1] チャットでの海外の？目を知り、日本との交流&活用多種多様な内容を知るため
wwwの活用 (3)

- [2] シミュレーションの作成 ・game形式のorientation (患者・家族向け) (3)
- [3] 適切な教材の作成のための方法について (3)
- [4] 他の大学・学部の授業を知る ・その効果の判定のしかた (2)

看護学

- [1] インターネット上での学校間での双方向の協同学習の実際と方法について (3)
- [2] 教材作成ソフトの紹介と作成方法を具体例を通して (3)
- [2] 使用している教材作成用ソフト (ディレクター・マイクロメディア社) のアセスメントとより具体的な使用方法 (3)
- [3] 映像制作概論 ビデオ制作概論及び実習 (撮影・編集) (3)
- [3] 制作したビデオ教材の評価 (3)
- [2] 学内LANにおけるOSの違いによるパソコンの相互乗り入れの実践例 (3)

看護学

- [7] スモールグループによるチュートリアル学習の指導 (3)
- [2] コンピュータによるシミュレーション・ソフトの作成法 (2)
- [3] コンピュータを利用したビデオ編集技術 (1)

心理学

- [1] 学生からのレポート提出を電子メールでした場合など、その管理の方法などについて
教えて頂ける機会があればいいと思います。本で自学自習すれば済むことではありま
すが、なかなかその気にならなくて……他のカテゴリーに関してもそうですが、具体
的なニーズが答えられるほどの知識すら持ち合わせていないのが実情です。コンピ
ュータを利用すればこのようなことができる (教授法、学務関連作業など) について教
えて頂けるような研修会があればぜひ、参加したいと思います (3)

体育

- [1] 電子メールによる学内資料 (会議、お知らせ) 等の省力化 (3)
- [1] 研究資料収集のための検索技術 (3)
- [2] 資料分析等の計算利用 (3)
- [2] 文章作成 (2)
- [3] 教室における画面の大きさと位置 (3)

健康教育・生理学

- [1] 設定・プロトコル言語等の基本的理解 (3)
- [2] マルチメディア・プレゼンテーション等、教育でどの様に生かせるか (3)
- [3] パソコン画面→スライド35mm (2)

心理学

- [1] 学生のレポート提出をEメールによることとする場合の留意点 (2)
- [5] 実物提示機の利用法 (1)
- [1] 学生に作成させたホームページの授業における利用法 (1)

生活科学（被服分野）

- [1] 世界の情報を得るためのインターネットの活用法 (3)
- [2] 将来にわたってコンピュータ利用の可能性の展望 (1)
- [3] 専門知識を持っていない者にも可能なビデオ編集装置・方法の紹介 (2)

文化人類学

- [1] 業績目録や研究内容、関心などについてのホームページ作成の仕方 (3)
- [1] パソコン画面（インターネット、ホームページ）などのスクリーンへの投影の技術や設備 (3)
- [6] ティームティーチングなどの複数の教員による授業のあり方の導入について (3)
- [3] 放送大学的な授業形態の導入の在り方について (2)
- [7] 教員間の教授法についての討論ネットワークづくり (2)
- [4] 科会や教授会などの会議をインターネットなどを通じて行えないか (2)
- [4 or 5] 講義や報告、発表などをフィールド（例えば海外）から実施することの可能性について（意見交換も含めて） (2)

生化学・食品科学

- [1] グループとの情報交換及び文献情報の収集 (3)
- [3] ビデオ利用による学生実験・学習の指導 (1)

理科教育（物理）

- [1] 電子メールによる情報交換 (1)
- [1] インターネットによるパソコン間の情報交換および操作 (2)
- [2] コンピュータを使った実験・観察の合理化 (3)
- [3] ビデオによる実験・観察の記録と解析 (2)

臨床心理学

- [1] インターネットによる研究資料の収集 (3)
- [1] インターネットによる文献検索 (3)
- [6] 一斉授業（講義形式）の進め方（AV教材の活用・新聞情報の活用） (2)

生産デザイン

- [1] 検索にとどまらない、つまり単に簡易辞典としてだけにとどまらないインターネット

- 利用方法について (3)
- [2] 文書表現（レイアウトを含む）の効果的方法について（やはりペーパーとして残すものに対する効果的な方法というものがあるはず） (3)
 - [4] 相手先とのやり取りの意図性を見出すこと (3)
 - [4] SCSの操作（しかしこれは操作の為の研修が必要なのではなく、教授に専念できるような操作部をつくるのが先と思う） (3)
 - [6] 教授法。基本的なことであるが、いわゆる教授法を知らないまま教育することの怖さを感じている人は実は多いのではないか (3)
 - [2] プレゼンテーションの効果的表現方法について学ぶ機会が必要（効果的ということはそれが話の主体であることを示している。それをうまく表現する方法とは） (3)

教育工学

- [1] 授業用にホームページを開設し、電子メールを使用して学生と情報交換する基礎技能 (2)
- [2] パソコン汎用ソフトを活用した授業資料の準備や授業自己評価法の研修 (1)
- [3] ビデオ教材の制作（撮影・編集）の基礎（短時間で）の研修 (1)
- [4] SCS、ISDN、インターネットによるテレビ会議システムの準備と使用 (1)
- [5] パソコン汎用ソフトや視聴覚機器を活用したプレゼンテーション技法 (1)

教育学

- [1] 専門分野の情報収集 (2)
- [2] 教材提示 (2)
- [3] 教材提示 (2)
- [4] 打ち合わせ 授業交換 (1)

●国立E大学 看護学科助手・助教授教官10名の回答

1) 電子メールとインターネット利用

- | | | |
|--------|-----|----------------|
| スケール 1 | 3 人 | 現在使用、特別な研究は不要 |
| 2 | 2 | 文献検索後の効率よい整理方法 |
| 3 | 3 | |
| 未記入 2 | | |

2) 上記以外のコンピュータ利用

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 0 | 統計分析、どの様な教授法、教材作成ができるか |
| 2 | 5 | デジカメで撮影した静止画像を携帯電話を利用して在宅から病院へ電送するシステム |
| 3 | 4 | スライド作成のソフトなどを含む新しいソフト利用方法 |

3) ビデオ利用

- | | | |
|---|---|-------|
| 1 | 4 | ビデオ編集 |
|---|---|-------|

- | | | | |
|----------------------|---|---|---------------------------------------|
| | 2 | 1 | |
| | 3 | 3 | ビデオ撮影などのスキル |
| 4) テレビ会議 (SCSなど) 利用 | | | |
| | 1 | 3 | |
| | 2 | 1 | 教育・研修会・訪問活動への多用性 |
| | 3 | 3 | 患者教育や遠隔医療への活用 |
| 5) 上記以外のメディア利用 | | | |
| | 1 | 2 | |
| | 2 | 3 | OHP, OHC, VTR などのメディア活用とその評価方法 |
| | 3 | 1 | 文献活用や多くの図書や資料の活用方法 |
| 6) メディアの関わらない資質向上の分野 | | | |
| | 1 | 1 | |
| | 2 | 5 | ロールプレイなどの教授方法、評価方法やその工夫 |
| | 3 | 1 | 大学教育の教授・学習方法 (1 人対 1 人、小集団方式、多人数方式教育) |
| 7) その他の分野 | | | |
| | 1 | 3 | |
| | 2 | 2 | 活き活きと交流できる人間関係 (教員間・学生間) 教育課程の評価 |
| | 3 | 0 | |

●国立K大学留学生センター日本語担当講師の回答

回答者 7 名 (非常勤 6 名、専任 1 名)

必要性が高いと答えたもののみを集計

各項目の前の数字は回答数

1) 電子メールとインターネット利用

- 1 電子メールの使い方
- 3 電子メールを活用した教育方法
- 3 ホームページの見方
- 2 ホームページの作り方
- 3 ホームページを使った教育方法

2) 上記以外のコンピュータの利用

- 2 基本的なコンピュータの使い方
- 1 ワープロの使い方
- 2 マルチメディア教材作成の方法

3) ビデオ利用

- 3 ビデオ教材の授業での活用方法
- 2 ビデオ撮影や編集の技術

- 4) テレビ会議（SCS等）の利用
 - 1 テレビ会議システムの使い方
 - 2 テレビ会議システムを使った教育方法
- 5) 上記以外のメディア活用
 - 3 デジタルカメラなどのカメラの利用
 - 2 LL、CAIなどの活用
 - 2 写真、絵などの利用
- 6) メディア以外の面での教員の資質向上の分野
 - 6 シラバス、授業計画の作成方法
 - 6 授業実施の方法
 - 5 教育評価の方法

資料2 研修プログラム提案

●フォーマット

(No.)

コース名：(研修コース・講座・ワークショップ等の名称)	(提案者：)
対 象：(一般の教員か特定の教員かの別、レベルなどを記述)	
目 標：(何を研修して、どこまでできるようになるかを一般的に記述)	
研修時間：(おおまかに、何日、何週間などと記述)	
研修内容：	研修方法：
(研修内容のあらましを、プログラムの見出しふうに、研修方法・形態と対応させて記述する。)	
研修評価の観点：	
(参加者が何をできるようになるかという観点で記述する。)	
ラショナル：	
(なぜこのプログラムが必要かの記述。代表的な参考書等もあるといい。)	
備 考：(その他、とくにあれば記述する。)	

●目 次

1. 教材研究ワークショップ——メディア教育入門——	佐賀 啓男
2. 授業のためのインターネット利用の諸形態	佐賀 啓男
3. インターネットとデータベースを活用する授業準備と授業設計	田代 和久
4. オフキャンパスの学生をサポートする学習指導のための研修	田代 和久
5. 英語プレゼンテーションとメディア活用	山地 弘起
6. コンピュータとつきあう「姿勢」	山地 弘起
7. アメリカ映画とインターネット	広瀬 洋子
8. 高等教育におけるメディアによる障害学生の学習・生活支援 映像・音声・情報収集のインターネット入門とパワーポイント作成	広瀬 洋子
9. SCSを利用した授業交流を進める ——ジェンダーをどう教えるか(サブタイトル例)——	瀬田智恵子
10. ウェブページを活用した『ジェンダー』教育を考える	瀬田智恵子
11. 学習理論体験2(スキナーと遊ぼう)	吉田 雅巳
12. 学習理論体験1(Aviation)	吉田 雅巳
13. メディア変換の方法—マルチメディア・基本の基本—	大作 勝
14. ファイルの操作(OS)—パーソナルコンピュータ・基本の基本—	大作 勝
15. 教員のためのビジュアルなWebデザイン	山本 和明
16. マルチメディア入門	立田 ルミ
17. 技術教育における授業を活性化するためのメディア教材の活用方法	山本 利江
18. 外国語(英語)教育のためのオンラインテスト利用の一形態	吉田 信介
19. マイクロプレゼンテーションのクリニック	保崎 則雄
20. (外国語)教育のためのビデオ活用の基礎	梅田 泉

21. プレゼンテーションソフトとしてのブラウザ利用法	梅田 泉
22. コミュニケーションとしての大学授業デザインの改善	市川 昌
23. 授業のための遠隔双方向性コミュニケーション研修	本郷 健
24. 遠隔教育のためのトレーニング	立田 ルミ
25. 大学授業への映画の利用	米谷 淳
26. 大学教育における目的利用のためのメディア機能の拡張	渡邊 光雄
27. コンピューターで編集できるビデオ教材	谷口 初美
28. 教育メディア利用に関する問題解決にむけて	久保田賢一
29. 事例研究：マルチメディアで何ができるか？	山本 和明
30. 教育メディア活動の総合評価	原 一雄
31. 教育メディアのシステム開発と経営ワークショップ	原 一雄
32. 授業計画の立て方	原 一雄
33. 研究発表にすぐ役立つパソコン活用 ー 予稿作成からプレゼンテーションまでー	玉田 和恵
34. 大学の教授学習理論とメディア・コミュニケーション形態	菅井 勝雄
35. インターネットによる実験実習の公開授業への参加	菅井 勝雄
36. “Development of Study Skills in the Information Age”	Madhumita Bhattacharya
37. マルチメディア入門（１）教材制作	棕代 惟親
38. 情報倫理教育入門	玉田 和恵

●提 案

（１）

コース名：教材研究ワークショップーメディア教育入門ー（佐賀啓男）	
対 象：マスコミ研究、教師教育などが専門で、「メディア教育」に関心をもつ教員	
目 標：「メディア教育」の概念を理解し、その教師教育用の教材の特徴を体験的に把握する。	
研修時間：１日	
研修内容：	研修方法：
教材パッケージの概要	講義
イギリスにおける「メディア教育」の概念と、OU/BFIの教材『メディア教育入門』の構成を概観する。	
個別実習	実習
教材パッケージ中の、写真を用いたメディア・テキスト作成の実際の作業のセッションを体験する。	
グループ実習	実習
小グループに分かれて『メディア教育入門』のテキスト認識とテキスト分析を含むセッション選択して、実際に課題を体験する形で吟味する。	
報告と討論	討論

グループごとに実習の成果を報告し、それをもとに、教材の意義と利用上の課題について討論する。

研修評価の観点：

1. メディア教育の概念が理解されたか。
2. 教材パッケージの特徴が、体験的に把握されたか。

ラショナル：このワークショップ・シリーズでは、大学等の授業で用いることのできるすぐれたメディア教材を、実際に体験する形で研究する。教材として選定したのは、イギリスの公開大学（OU）と英国映画機関（BFI）が共同で開発した『メディア教育入門』（Media Education: An Introduction, 1992）である。

これは、メディア（特にテレビや映画などのマスメディア）について、青少年が批判的に受容することをねらうカリキュラムのための、教師教育用の教材であり、マスコミュニケーション研究、メディア研究、あるいは教師教育（社会、国語、英語、美術等）を担当し、メディア教育に関心をもつ方が対象になる。社会におけるメディアの役割に自覚的になるよう青少年を育成する教育分野として重要である。

備考：個別の作業とグループ別の作業があるので、参加人数は20名以内。グループの数の分だけの教材パッケージとビデオ機器を準備すること。また、教材に用いられている言語は英語なので、事前に中心となる資料は配布しておいた方がよい。

（2）

コース名：授業のためのインターネット利用の諸形態（佐賀啓男）

対 象：教員一般、入門段階、ワープロの経験は必要。

目 標：大学等の授業において、インターネットがどのような形態で利用できるかを理解し、自身の授業のために利用法を計画することができる。

研修時間：1日～1.5日

研修内容：

研修方法：

導入

講義

- ・インターネットの概要

利用形態

講義と実習

- ・電子メールによる質問、レポート提出
- ・授業の補助テキストとしてのウェブ・ページ
- ・討論のためのニュース・グループ、掲示板、会議室
- ・課題追究、プロジェクト作業のためのインターネット
- ・ウェブ・ページのデザイン原理
- ・ネットワークを利用した学習の評価

利用計画の立案

実習と討論

- ・シラバスとコース計画への位置づけ
- ・利用形態の選択と配置

- ・材料の選択とページのデザイン

研修評価の観点：

- ・インターネットの利用形態がどれだけ理解されたか。
- ・利用計画の立案がどれだけ具体的になされたか。

ラショナル：大学等のキャンパスのネットワーク環境が急速に整備されつつある。教員も学生も日常的に学内のコンピュータを使い、電子メールをやりとりしたりウェブのページを利用するようになっており、この環境をみずからの教育活動のなかで利用しようと計画する教員も増えている。

そこで、この研修プログラムでは、これから教授活動にインターネットを利用しようとする教員に対して、大学等の授業でインターネットがどのように利用できるかを導入し、自身の授業のために利用法を計画することができるようになることをめざす。実習を重視し、この研修のあとに、教授用のページを自分で作成するための基礎を提供する。

参考文献：Porter, L.R. (1997) Creating the Virtual Classroom: Distance Learning with the Internet, John Wiley & Sons.

参考URL：

ペンシルバニア州立大学遠隔教育部：<http://www.cde.psu.edu/DE/FacDev/faculty.html>

備考：ワークショップ形態になるので、人数は20名以内。各人が個別にネットワーク・コンピュータを使える環境で実施。WindowsかMacかをあらかじめ参加者に伝えること。

(3)

コース名：インターネットとデータベースを活用する授業準備と授業設計 (田代和久)

対象：人文系基礎科目（哲学、文学、歴史、美術史等々）を担当する教員で、これまでインターネットやデータベースにアクセスの経験のないもの

研修目標：インターネットやデータベースを活用して当該授業の教材に必要な情報を収集し、加工、編集してマルチメディア教材の作成ができるようになること

研修の期間：3日間（コンピュータの基本操作の習得を含む）

研修内容：ここではインターネット及びデータベースへのアクセスと情報の収集、加工、編集を中心とする部分について

- ・インターネット及びデータベースの概要
- ・インターネット及びデータベースへのアクセスの実際
- ・インターネット及びデータベースによる情報の収集
- ・関連リンクへのアクセス及び情報の収集
- ・収集情報の加工及び素材化
- ・素材情報の教材化

研修評価の観点：文字情報（板書）と音声情報（教員の話）による授業とマルチメディア教材を活用する授業との学生の理解度や満足度を比較すると共に、こうした教材を準備する教員の負担度とを測定することで、大学の授業にメディアを活用する意味について大学人の本音を探

る。

ラショナル：従来、当該科目の授業は板書と教員の話による一方的なレクチャー形式によるものが多く、学生の興味や知的好奇心を引き出す工夫に欠けがちであったといわざるを得ない。そうした中で教室における私語や居眠り、あるいは内職等は日常化し、学ぶ喜びや教える喜びを教室空間で共有できない事態を引き起こすのである。しかし学生の振る舞いだけを批判しても問題は一向に解決しない。問題は伝統的なレクチャースタイルの教室授業では情報の伝達に限界があるのである。一例を挙げれば、万葉植物の正確な知識がないと解釈不可能な場面で、インターネットやデータベースにアクセスして、瞬時にして鮮やかなカラーコピーによる万葉植物の画像が提示されるならば、学生の知的好奇心は格段に揺さぶられるであろう。このように教室授業の改善の一助としてインターネットやデータベースを活用して学生の知的好奇心を喚起させることは有効な手段と思われる。人文系科目の授業準備や授業設計にインターネットやデータベースの活用が有効な手段となれば、こうした研修の潜在的ニーズは高いものと思われる。

備考：コンピュータの基本操作の研修とドッキングした方式が望ましいと思われる。これとの関連で15名程度の参加人員が適正と判断される。

(4)

コース名：オフキャンパスの学生をサポートする学習指導のための研修 (田代和久)

対 象：大学通信教育で学習指導を担当する教員

目 標：マルチメディア環境で、ネットワークを通じてオフキャンパスの学生の学習指導ができることを目標とする。

研修期間：1日

研修内容：

研修方法：

- ・『CD-ROM版学習ガイド』の概要
- ・遠隔手法による学習指導の方法と実践
- ・ドリルとシュミレーションによる実践

講義と実習の併用
講義と実習の併用
講義と実習の併用

研修評価の観点：ネットワークとマルチメディアによる学習指導は学習継続をどこまでサポートできたかという視点

ラショナル：平成9年度の大学審議会の答申以来、大学通信教育をめぐる環境は大きく変わりつつあるが、オフキャンパスの学生の学習を支援する体制は、従来の形態と殆ど変わりはない。マルチメディア環境下における新しい遠隔学習指導の研修は大学通信教育のみならず、通信制大学のオフキャンパスコースにとっても潜在的ニーズは高いものと思われる。

備考：『CD-ROM』を使用して個別実習を行うので、参加人数は10～15名程度。人数分のコンピュータが必要

(5)

コース名：英語プレゼンテーションとメディア活用（山地弘起）

対 象：国際学会での発表、英語による授業、国際共同授業などを行う教員

目 標：効果的な英語プレゼンテーションのためのメディア活用を学ぶ

研修内容：

プレゼンテーションのための英語スキル
OHP・プレゼンテーションソフトの使い方
マイクロプレゼンテーションとクリニック

研修方法：

講義・実習
講義・実習
実習

研修評価の観点：

1. プレゼンテーションを円滑に行う英語スキルが身についたか
2. OHP・プレゼンテーションソフトを適切に活用できるようになったか

ラショナル：国際学会での発表や国際共同授業などで、効果的な英語プレゼンテーションがますます求められるようになる。英語力の不安をプレゼンテーション・メディアの活用で低減することも可能である。そこで、最低限の基本表現やとっさの一言、ジョークなどの英語スキルに加え、効果的なメディア活用のスキルを習得する機会が必要である。

備考：個別実習を行うので参加人数は15名まで。全編を英語で行い（total immersion）、かつネイティブスピーカーのサポートを得る。OHPとプロジェクタ、ビデオカメラ、人数分のノートパソコンを要する。

(6)

コース名：コンピュータとつきあう「姿勢」（山地弘起）

対 象：コンピュータと接する教員

目 標：コンピュータ操作において快適な身体状況を保つために

研修時間：半日

研修内容：

コンピュータ・ストレスとは何か
座位・呼吸・腕の使い方
ストレス緩和の工夫

研修方法：

講義
実習
講義・実習

研修評価の観点：

1. 姿勢のもつ様々な影響が理解されたか
2. コンピュータ操作時の適切な姿勢をとることができるか
3. コンピュータ・ストレスの自衛策を学ぶことが出来たか

ラショナル：コンピュータ操作時の身体的・心理的な問題は、潜在的にかなりの脅威となっている。盲点になりがちなことであるだけに、敢えて研修の形で明確化し、日常の自己防衛に役立てる機会が必要である。自身の「姿勢」に敏感になっておくことで、学生の「姿勢」にも注意を促すことができる。

参考文献：Linden,P. 1995 Compute in comfort. Prentice Hall.

備考：個別実習を行うので参加人数は20名まで。各自の姿勢のビデオ・フィードバックを行うので、カメラ数台とプロジェクタが必要。

(7)

コース名：アメリカ映画とインターネット（広瀬洋子）

映像・音声・情報収集のインターネット入門とパワーポイント作成

対 象：教員一般、メディア利用入門段階、中級程度の英語読解能力のある人

目 標：インターネットによって、電腦世界の世界最高峰ハリウッド映画を多様な角度から楽しむことでその利便性と重要性を体験し、大学における授業や研究にインターネットを応用することを学ぶ。加えてパワーポイントによるプレゼンテーションを研修する。

研修時間：1日—2日

研修内容：

研修方法：

導入 ＊インターネットをつかって講義

- 1) 愉悅のインターネット体験：ハリウッドにインターネットで侵入。好きな映画、監督、なつかしの名優などなど、ホームページにアクセス
- 2) ＊講義：インターネットの概要：Webブラウザとネットサーフィン
- 3) ＊実習：インターネットによるネットサーフィン：さまざまなサイトにアクセス
映画製作・映画祭・映画批評・個別情報・
インターネットとeメールを利用して書籍、ビデオの購入
- 4) ＊実習：各自のテーマを設定し情報収集し、自分のCPに取り込み、パワーポイントを利用してプレゼンテーションを考える
- 5) ＊プレゼンテーション：収集した情報をもとにプレゼンテーション

【注意】研修を二日コースに想定した場合は、一日目を1)、2)、二日目を3)、4)。

研修評価の観点：

- ・インターネットによる情報収集、eメールによる書籍の購入体験
- ・パワーポイントを利用したプレゼンテーション

ワークショップ形式で、人数は20名以内。各人が個別にネットワーク・コンピュータを使える環境で実施。Windows環境で複数のブラウザ、パワーポイントが必要。

参考文献：障害者のメディアアクセスの研究

1997放送教育開発センター研究報告102号

ラショナル：全国の高等教育機関ではCPネットワーク環境の整備が急速に進んでいる。高等学校以下でのメディア教育も進められ若い世代のメディア能力は年々向上している。それにひきかえ、大学教員のメディアリテラシー能力はかなりのばらつきがあり、そのことが高等教育機関全体のメディア利用環境を前進させる上で大きな弊害となっている。特に長年メディアに頼らずに授業や研究を進めてきた教員のメディアリテラシーを高める意欲を向上させることは困難をきわめている。

そこで、本研修では世代を問わず多くの者が関心を寄せる映画を入り口にして、好奇心、知りたいという欲求、を原動力にしてインターネットの世界に遊ぶ楽しさを体験させる。米国の国家的産業でもある映画を制作するハリウッドは、画像・映像、素晴らしいサイトがぎっしり詰まった世界屈指の電腦空間の宝庫であり、知る喜び、調べる喜びを通じてメディア利用に対する拒否感を払拭し、メディアリテラシーを向上させる契機となるだろう。

その上で、インターネットでの検索、ダウンロード等を身につけ、テーマをしぼった検索や資料の収集を習得し、今度はパワーポイントを使ったプレゼンテーション技法を身につける。

本研修は、従来ありがちなメディア利用は仕事上必要であり、それなしでは波に乗り遅れるといった動機から入る研修ではなく、参加者の知りたい、使った、目から鱗が落ちた、楽しい、すごい、嬉しいをキーワードにして進めたい。

(8)

コース名：高等教育におけるメディアによる障害学生の学習・生活支援 (広瀬洋子)

対象：教員・図書館員・事務職など障害者と関わる部署にある人、メディア利用入門段階

目標：高等教育機関で学ぶ障害を持つ学生が年々増加している一方で、入学後のサポート体制は個々の大学にまかされ、貧弱な対応しかできない大学も少なくない。この研修では彼らの学習方法や生活の実態を知り、いかにメディア機器の利用が彼らの学生生活をサポートする上で重要な理解し、大学全体のメディア環境整備の中に位置づける。

研修時間：2日

研修内容：

研修方法：

1日目

- 1) 講義1：高等教育機関に学ぶ障害学生
- 2) 講義2：障害別のメディア利用（視覚障害・聴覚障害を中心に）
- 3) 講義3：障害者が大学で学ぶということ：支援に求められるもの

<必要な配慮>障害の自己申告、機器整備、経済的・人的援助、授業、教材、事務連絡、窓口の確保、メディアアシスティッドラボ、大学全体のバリアフリー環境を目指して

2日目

- 1) 障害者が利用するメディア機器
入力システム：点字入力、墨字入力を点字に変換、音声点字変換
出力システム：点字プリンター、サーモグラフィックス等
- 2) 通信システムの利用法
モバイル・ポケベル等の可動通信機、ファックス、Eメール
- 3) 大学全体のバリアフリー環境の中での位置づけ

研修評価の観点：

障害者のメディアアクセスについての理解と、使用機器の利用方法の習得
大学環境の中で障害者のメディアアクセスの位置づけの設計構築

人数は30から40名くらい。講師がコンピュータを使える環境で実施

点字プリンター、音声入力・出力システム内蔵CP、点字ソフト、各種通信機器の整備が必要

ラショナル：多様なメディアによる学習形態の発達、障害者への高等教育の門戸を大きく開く可能性を秘めている。たとえば、視覚障害者の場合は、点字入力の音声利用のコンピュータ、聴覚障害にはファックスや可動通信機器、肢体不自由は特殊に改良されたコンピュータ。これらの新しい技術の開発で従来までの障害者の学習状況では考えられなかった環境が可能になり、障害者の職域も拡大した。

しかし、現在の日本の大学において、障害者へ門戸を開放する大学数は増加しているが、入学後の学習、生活支援は個別の大学や学生個人の自助努力にまかされており、大学の規模や障害者の在学数によってそれぞれがばらばらに苦慮している状態である。

本研修講座は参加者は障害者のメディアアクセスの利用法を学び、大学の授業あるいは生活の中でどのような配慮を必要とするのか、その問題点と解決法を探り、実際の大学のメディア環境整備の中で位置づける方法を習得する事を目的としている。

こうした研修は、各大学ではニーズはあっても経済的バランスから後回しにされがちであり、全国の大学のメディア利用に関して支援する、という観点からメディア教育開発センターの研修として重要な意義があると思う。また全国的にみれば、高等教育機関および公的サポート機関も含めてかなりのニーズが見込めると考えられる。

(9)

コース名：SCSを利用した授業交流を進める（瀬田智恵子）

－「ジェンダー」をどう教えるか－（サブタイトル例）

対 象：社会学、女性学、家庭科教育等「ジェンダー」に関連のある授業内容を担当している高等教育教員

目 標：

1. 人文・社会科学科目を担当する教員の間でのSCS利用を促進する。
2. SCSの基本的な利用法を学習する。
3. SCSの利用を通して、テレビ会議システムにおける演出技法を学習する。
4. SCSの利用を通して、「遠隔教育」の内容と方法のノウハウを学習する。
5. SCSによる他大学との授業交流により授業の活性化を図る。
6. SCSによる授業交流を通して、教員の授業改善への意識化を図る。
7. 「ジェンダー」に関連する教育方法について、経験交流が出来る。
8. 学生の「ジェンダー」に関する学習の充実を図ることが出来る。

研修時間：5日（SCS活用講座の持ち方により日程は可塑的。報告書作成は別途の日程）

研修内容及び方法（例）：

1. 導入

*SCSの概要

講義とデモンストレーション

（SCSで何が出来るか）

2. SCS研究会

情報交換と実習

(SCSの活用のために)

*授業の実践と課題について

*授業改善のための提案

*授業交流のための事前協議

(授業アンケート等も視野に入れる)

3. SCS講座

複数大学との授業交流

(SCSを活用する)

*講義中心の授業の場合

*学生間の討議中心の授業の場合

(各授業、講座の展開例は別途。

必要に応じてアンケートの実施も)

4. SCS研究会

情報交換と実習

(SCSを活用してみて)

*SCSによる授業の実践と課題について

*SCS活用促進のための提案

(アンケートの結果等も反映させる)

5. 研修報告の作成

(事例の蓄積のために)

研修評価の観点：

1. SCSへのアクセスが容易になったか

2. 遠隔授業の内容と方法に関するノウハウを得られたか

3. 他大学との授業交流による学習の活性化が図られたか

4. 「ジェンダー」に関する学習の充実が図られたか

ラショナル：情報通信技術の進展により、高等教育機関においても授業へのマルチメディアの積極的な採り入れが進められる中、通学制の大学における「遠隔授業」の取り込みや「通信制大学院」など新しい形態の教育も可能になっている。

メディア教育開発センターは、衛星通信大学間ネットワーク事業（SCS）のHub局として利用の促進を図っているが、理工学系、情報教育系の教員の利用に比べてややもすると人文・社会科学系の教員の利用は低迷しがちである。

本コースは、SCSの利用に消極的であり、かつ担当科目に共通性のある教員を対象に教育実践上の課題に関する経験交流、授業交流等を通して、授業改善に資するSCSリテラシーの向上を図ることを目的としている。

目標は上記の通りであるが、その重点はニーズに応じて変更する。

(10)

コース名：「ウェブページを活用した『ジェンダー』教育を考える」 (瀬田智恵子)

対 象：社会学、女性学、家庭科教育等「ジェンダー」に関連のある授業内容を担当している高等教育教員

目 標：

1. 「ジェンダー」を手がかりにコンピュータアクセスを促進する。
2. ウェブページの活用を授業に取り入れることで、「ジェンダー」教育を活性化する。
3. 学生のコンピュータリテラシーを促進する。
4. 英語による「ジェンダー」関連文献の読解力を促進する。

研修期間：3日 (コンピュータの操作を実習しながら進める)

研修内容と方法 (例)

1. 導入 講義と実習
 - * キーボードとマウスの使い方
 - * コンピュータの動かし方の理解
 - * ワードプロセッサとペインティング・パッケージの使い方
 - * 保存の仕方
 - * インターネットとWorld Wide Web入門
 - * 検索の仕方
2. 実習
 - * テーマの設定
(例) 女性とメディア、女性とテクノロジー、開発と女性、女性と教育、セクシャルハラスメント、諸外国の女性政策、男性問題、等
 - * 検索と情報・データの収集
 - * 収集情報・データを基に小レポートの作成
3. 報告とコメント (授業への応用を視野に) フリーディスカッション
 - * 「ジェンダー」教育に関して
 - * ウェブページ活用に関して

研修評価の観点：

1. コンピュータアクセスへの抵抗感が少なくなったか
2. 「ジェンダー」教育の充実のヒントを得たか

ラショナル：高等教育におけるメディアの活用は国際的な動向であるが、総体的に男性に比して女性はメディアの活用には消極的な傾向にある。調査の結果では、小学校教師においてはコンピュータ・リテラシーに関する性差は大きい。これは教員養成にとどまらず女子学生のコンピュータ・アクセス、ひいては高等教育における人文系(女性)教員の課題とも考えられる。

イギリスの大学の例などでは、女子学生や女子教員のコンピュータ・アクセスを促進するためにウェブ上に「ジェンダー」のArchivesのリンクを張り、テーマへの関心を手がかりにコンピュータの活用への関心を導いている。

この研修プログラムでは、現在我が国が国際社会の中では後進的との批判もあるセクシャル

ハラスメントの問題も含めて「ジェンダーに敏感になること」を狙った教育の充実を視野に入れて、コンピュータ・リテラシーとコンピュータ・アクセスを高めるための入門コースを提供する。

(11)

コース名：学習理論体験2（スキナーと遊ぼう）（吉田雅巳）

対 象：全

目 標：学習理論の一面だけを活用したメディア活用の講習を受講することにより、学習理論の特性、有用性、自己の教育環境への適応を体感する。

研修時間：1日

研修内容：

研修方法：

<導入> 講義

*学習理論の概要

スキナーのオペラント条件付け

- ・学習は明らかな行動の変化の機能である。
- ・行動の変化は、環境で起こる事象（刺激）への個人的反応の結果である。
- ・反応は、ことばの定義や、ボールを打ったり、数学の問題を解いたりという結論を作る。
- ・反応は、ことばの定義や、ボールを打ったり、数学の問題を解いたりという結論を作る。
- ・反応は、刺激に応答させるだけでなく、引き出すことができる。

*教材の紹介（タイピング練習の教本、およびコンピュータ）

<学習形態> 講義と実習（個別学習）

教師：学習課題の説明（タイプ訓練授業の設計）

ステップ1

教 師：活動説明（教本分析）

教本を読み、タイプ指導の手順を学ぶ

ステップ2

教 師：活動説明（強化要素の思索）

学習者：正の強化因子を思索する：言語的な誉めことば、地位を与える、成就感を与える、満足感を与えるなどの教師行動をできるだけたくさん考える。

学習者：負の強化因子を思索する。負の強化因子とは正の強化因子の逆の刺激ではない。罰である、これはその反応を少なくする効果をもつ。

ステップ3

教 師：活動説明（教授環境の設計）

学習者：剥奪と報酬の提示により学習者の衝動（モチベーション）を喚起する方法を創案する。

(例)

1 分間に100字打ち込めるようになれば、1 号級昇進させます。

1 分間に60字以内だと 1 号級給与を下げます。

などの設定を考える。

ステップ 4

教 師：活動説明（授業設計）

学習者：

- ・ 段階的な訓練を設計する。
- ・ 各段階（ステップ）では学習者の反応がいつも正解となり、それゆえいつも正の強化となる
ように難易度を調整する。
- ・ 各段階では、訓練の達成を即時に評価する。
- ・ 評価基準は達成行動の程度による
- ・ 即時に正あるいは負の強化を行う。
- ・ 訓練プログラムの最初に達成すべき目標を学習者に明確にし、さらに教授環境への対応も行う。

ステップ 5

教 師：活動説明（実施）

学習者：学習者の作成した訓練計画のうちの一つを取り上げ、その設計者が教師役となり他の参加者全員が生徒役になり授業を行う。

プログラムの評価は、設定された目標を何人の生徒役が達成できたかで判断する。

学習者の心的な情動や感想は評価しない。

ステップ 6

教 師：活動説明（学習事項の適用）

学習者：自分の研究室での活動、教育活動でこの方策が適用可能な場面、機器操作を探す。
そしてできるだけたくさん列举する。

研修評価の観点：

ステップ 2：列举の数

ステップ 3：強化の数とそれぞれのインパクト（これについては相互評価する）

ステップ 4：各段階の学習内容の量や難易度の適切性

ステップ 5：達成度（人数％）

ステップ 6：列举の数および、相互評価による人気度

ラショナル：授業を企画することにより、その特性を体感する。さらに、素材としてメディア活用を行うことにより、メディアへ親しむ機会を持つ。

扱った学習理論のすべてを網羅しているわけではないので、感じた問題点や応用、興味は、自己学習で継続して学べるように支援する。

参考文献：

Skinner,B.F.(1950), Are theories of learning necessary?, Psychological Review, 57(4), 193216

Skinner,B.F.(1953), Science and Human Behavior, New York:Macmillan

Skinner,B.F.(1968), The Technology of Teaching, New York:AppletonCenturyCrofts

(12)

コース名：学習理論体験1 (Aviation) (吉田雅巳)

対 象：全

目 標：学習理論の一面だけを活用したメディア活用の講習を受講することにより、学習理論の特性、有用性の理解と、自己の教育環境への適応力を養う。

研修時間：1日

研修内容：

研修方法：

<導入> 講義

*学習理論の概要

ロスコーの飛行術 (Aviation)

- ・学習内容に方策、意思決定、知覚の3カテゴリーが存在する。
- ・失敗をしないための教育。失敗から内容を改善する設計。
- ・作業分析、階層目標、尺度評価テスト
- ・シミュレーターによる訓練

*教材の紹介 (ビデオレコーダーおよびマニュアル)

<学習形態> 講義と実習

教 師：学習課題の説明 (ビデオの予約録画方法学習シミュレーションの設計)

教 師：3人のグループ編成をする (グループ学習)

ステップ1

教 師：活動説明 (技能カテゴリー分析)

方策担当：作業リスト読み上げ、操作の指差し確認、機械の動作表示パネルの目視確認による。基本的なビデオ機器操作管理の情報を収集する。

意思決定：シミュレーション学習で出現が想定される誤操作の同定。各操作段階での評価基準の検討。目標達成と危険回避が対立する場面の検討。

知覚担当：ビデオの各スイッチ操作の分類・整理。ビデオのスイッチ機能毎の学習資料の作成。

学 習 者：各担当ごとに、マニュアルから基礎資料を収集する。アイディアの企画を行う。

学 習 者：グループで安全にビデオ録画を達成することを学ぶ3人用シミュレーションを設計する。

設計では、

段階的な訓練にする

各段階でその達成を尺度評価する

各段階ごとの達成目標を階層構造に記述した系列の作成するようにする。

ステップ2

教 師：活動説明（シミュレーションの相互評価）

学 習 者：シミュレーションを別のグループで試行する。

学 習 者：その後、相互評価のためのセッションを行う。

ステップ3

教 師：活動説明（学習事項の適用）

学 習 者：自分の研究室での活動、教育活動でこの方策が適用可能な場面、機器操作を探す。そしてできるだけたくさん列挙する。

研修評価の観点：

ステップ1で、どこまで詳細な分析ができたか。シミュレーションの場面設定が適切であったか。

ステップ2で、シミュレーションの問題点を十分に指摘できたか

ステップ3で、どれだけの適応場面をあげることができたか。

ラショナル：授業を企画することにより、その特性を体感する。さらに、素材としてメディア活用を行うことにより、メディアへ親しむ機会を持つ。

学習理論を網羅しているわけではないので、感じた問題点や応用は、自己学習で学べるように支援する。

参考文献：

Roscoe,S.N.(1980), Aviation Psychology, IA:Iowa State University Press

Caro,P.(1988), Flight training and simulation, In Weiner,E. and Nagel ,D.(eds.), Human Factors in Aviation, CA:Academic Press

Jensen,R.S.(1989), Aviation Psychology, UK:Gower Technical Publisher

(13)

コース名：メディア変換の方法ーマルチメディア・基本の基本ー（大作 勝）

対 象：教員一般、入門段階、経験は不必要

目 標：大学等の授業において、教材の電子化をどのようにすすめることができるかを理解し、電子化教材開発が自分自身でできるようになる

研修時間：2日

研修内容：（研修方法）：

導入（講義）

- ・アナログデータとデジタルデータ
- ・旧メディアと新しいメディアのつなぎ
- ・ファイルの大きさとその扱い

利用形態（講義と実習）

- ・研究資料の電子化
- ・授業・講義資料の作成

- ・論文の作成
- ・報告書の作成
- ・学会予稿の作成
- ・ウェブページの作成

利用計画の立案（実習と討論）

- ・マルチメディア教室での講義資料の位置づけ
- ・利用形態の選択と配置
- ・材料の選択とページのデザイン

研修評価の観点：

- ・デジタルデータとアナログデータの違いが理解されたか
- ・ファイルの大きさは何によって決まるかが理解されたか
- ・利用計画の立案がどれだけ具体的になされたか

ラショナル：大学等の教育環境は大きく変わり、いわゆるマルチメディア教室が急速に整備されつつある。またキャンパス内のネットワーク環境が急速に整備され、電子メールやウェブが授業に利用されている。

例えば、

- 1) 授業中に写真教材をテレビモニタへ提示したい、
- 2) 学会のレジメや報告書の中に写真資料を2、3枚貼り付けたい、
- 3) 自分でホームページを開き、そこに写真を貼り付けたい、
- 4) 印刷文書をテキストファイルにして、整理したい。

というような欲求にかられることがある。

これらは全てメディア変換という、もっとも基礎的・基本的な事柄と関係した技術であるが、この簡単な技術の不足が障害となって、学内のマルチメディア化がしばしば阻まれている。

ここではまず自分の手でプリント写真をスキャナーを用いてデジタル化し、得られたデジタル写真を編集加工し、文書に貼り付ける技術を身につける。また印刷文書をデジタル化し、ファイルとして保存する方法を学ぶ。またビデオ動画から静止画を得る方法、デジタルカメラのデータ処理の方法についても学習し、最終的に各自のシラバスに基づいた授業資料5コマ分とホームページ1頁分を作成する。これらの技術は、もちろん報告書作成、論文作成に応用できる。本研修では実習を重視し、どのような場面でどのようなコンピュータソフトを選べばよいかについても学ぶ。

参考文献：

参考URL：

備考：ワークショップの形態になるので、人数は20名以内とする。材料として、写真、文書を持参する。

(14)

コース名：ファイルの操作（OS）ーパーソナルコンピュータ・基本の基本（大作 勝）

対 象：教員一般、入門段階、多少の経験は必要である

目 標：コンピュータに関し万年初心者を卒業して、自分のパソコンは自分自身で管理できるようになる

研修時間：1日

研修内容（研修方法）：

導入（講義1コマ）

- ・ファイルとは
- ・フォルダとは
- ・文字コードとは
- ・パスとは

利用形態（実習2コマ）

- ・ファイルの操作
- ・正しいマウスの使い方
- ・ファイルとフォルダ
- ・簡単なファイル操作
- ・いじると危ないフォルダとファイル
- ・ファイルの保存
- ・ファイルのアクセス権
- ・セキュリティに関することがら
- ・正しいアンインストール

利用計画の立案（討論1コマ）

- ・電子メールを正しく使える
- ・ファイルをきちんと整理できる

研修評価の観点：

- ・通信の過程でファイルの性質の重要性が理解されたか
 - ・コンピュータの中でOSの果たしている役割が理解されたか
-

ラショナル：今日パーソナルコンピュータはメディアの中心である。コンピュータなしには、研究活動も教育もできないようになってしまった。しかしながら大学の中には、いつまでたっても自立できない万年初心者？があふれている。わたし自身も小さなトラブルを解決するため、周りの人にたびたび迷惑をかけてきた。コンピュータは人に優しい？ウィンドウタイプが主流になって、もはや誰でも使えるということにはなった。しかしながらただ文章が打てる、メールが打てるというのと、分かっているというのは別物である。ハードはひとまずほおっておいても、ソフトの基本は、基本ソフト（OS）である。基本ソフトが理解できれば、小さなトラブルには対処できるはずである。基本ソフトの基本はファイルの扱いである。正しくファイルが扱えれば、もう初心者は卒業だ。

コンピュータは今通信の道具になった。コンピュータを使っているいろんなことがしたい。

例えば、

- 1) 大学内で数人による共同研究がしたい、
- 2) 小さな委員会をコンピュータ上で開きたい、
- 3) 大学内をペーパーレスにしたい、
- 4) メールの山を何とかしたい、
- 5) 論文の山、雑誌の山を整理したい、などということがある。

これらは全てファイル操作に関係している。ウィンドウズになって、OSはほとんど勉強しなくてもいいものと勘違いされている。もっともOSは知らなくともソフトは使える（と信じている人が多い）。OSはコンピュータの基本の基本である。車の運転ならハンドル操作のようなものである。全くおもしろくない。したがってまじめに取り組まない。その結果万年初心者にとどまるのである。本研修ではコンピュータについても最も基本から勉強する・遠回りすることが、最も近道であることを学ぶ。

参考文献：特になし

参考URL：なし

備考：ワークショップの形態になるので、人数は20名以内とする。材料として、フロッピーディスク1枚程度にはいる、数種類からなるファイルを数十個用意する

(15)

コース名：教員のためのビジュアルなWebデザイン (山本和明)

対象：教員一般、入門段階、ワープロの経験は必要。

目標：大学等の授業や研究成果の公開のために、ビジュアルなWebページを開発する方法を学び、授業や研究成果公開のためにWebを設計し、開発することができる。

研修時間：3日～5日

研修内容：

研修方法：

導入

講義と実習

・インターネットの概要：Webブラウザとネットサーフィン

Webデザイン

講義と実習

- 1) Webページの制作：HTML入門
- 2) デジタル写真：デジタルカメラとPhoto Retouch *
- 3) Webデザイン：Webグラフィックスとページデザイン
- 4) 対話型ページの開発：JavaScript *

利用計画の立案

実習と討論

- 5) Webの設計とテンプレートの開発：教材の提示、課題と進捗チェック、研究成果の公開

【注意】各モジュールは1日コースを想定している。*印のモジュールはオプションを意味する。オプションによって、3日から5日までのコース設定が可能。各モジュールを単独に1日コースとして設定することもできる。

研修評価の観点：

- ・ ビジュアルデザインとグラフィックスの活用
- ・ 利用計画の立案とWebの設計

ラショナル：大学等のキャンパスのネットワーク環境が急速に整備され、研究室のみならず教室においてもインターネットを利用した研究、教育環境が広く利用できるようになってきた。研究成果の公表や授業の教材提示、課題の発表をインターネット（Web）で行うことを計画する教員も増えている。また、デジタルカメラやDVカメラが急速に普及し、ビジュアルな素材を活用することも容易になっている。

この研修プログラムでは、これから研究活動や教授活動にインターネットを利用しようとする教員に対して、インターネットがどのように利用できるかを導入し、自身の研究成果の公開や授業において、ビジュアルなWebの利用法を計画し、開発することを目標とする。実習を重視し、この研修のあとに、教授用のページや研究成果のページを自分で作成するための基礎を提供するとともに、受講者（学生）に課題をWebで提出させるための導入教育を計画できることも目指している。

参考文献：

- Castro, E.: HTML 4 for the World Wide Web (Second Ed.), Peachpit Press
Aaland, M: "Photoshop for the Web", O'Reilly
Siegel, D.: Creating Killer Web Sites (Second Ed.), Hayden Books
Siegel, D.: Secrets of Successful Web Sites, Hayden Books
Negrino, T. & Smith, D.: JavaScript for the World Wide Web (Second Ed.), Peachpit Press
Heinle, N.: Designing with JavaScript, O'Reilly (翻訳：オライリー・ジャパン)

参考URL：（準備中：<http://yama.ia.inf.shizuoka.ac.jp/text/index.htm>）

備考：ワークショップ形態になるので、人数は20名以内。各人が個別にネットワーク・コンピュータを使える環境で実施。Windows環境またはMacintosh環境で、Photo Retouchなどの必須のアプリケーションがある。撮影をするには、デジタルカメラ、またはDVカメラを数人に1台用意すること。写真やビデオを取り込むには、スキャナ、フィルムスキャナ、デジタルカメラ、またはDVカメラの取り込みインターフェース（またはNTSCで取り込みインターフェース）を少なくとも1セット用意すること。

(16)

コース名：マルチメディア入門（立田ルミ）

対 象：コンピュータを使ったことのある一般の教員

目 標：コンピュータで静止画、音声、動画が扱えることを周知していただく

研修時間：3日間

研修内容：

研修方法：

導入

- ・ マルチメディアの概要

講義

利用形態

- ・静止画作成
- ・写真の取り込み
- ・デジタルカメラを使う
- ・オーサリングソフトを使う
- ・アニメーション作成
- ・音声の取り込み
- ・動画の取り込み

講義と実習

利用計画の立案

- ・マルチメディアの組み合わせ
- ・利用形態の選択と配置
- ・材料の選択とデザイン
- ・CDROM作成

研修評価の観点：

- ・静止画の取り扱いができたか
- ・音声の取り扱いができたか
- ・動画の取り扱いができたか
- ・オーサリングの取り扱いができたか
- ・CDROMに教材が作成できたか

ラショナル：パソコンでもマルチメディアが取り扱えるようになった現在、静止画、写真、アニメーション、音声、動画がどのように処理できるかを理解し、実際にそれらを取り込んだ教材を作成してみる。マルチメディア教材を作成するには、どのようなハードウェアとソフトウェアが必要で、どのくらいの価格のものかを知る。また、パソコンにそれらの特別なハードウェアを装備するには、どのような環境が必要かも知る必要がある。CDROMに作成された教材は、特別なハードウェアとソフトウェアがなくても作動することを実際に確かめてみる。このようなマルチメディア教材を作成するのに、どの程度の時間と予算が必要かを実際に体験してもらう。

必要なハードウェア

デジタルカメラ、スキャナー、デジタルムービーカメラ、録音マイク

必要なソフトウェア

スキャナー読みこみソフト (Photoshop等)

ムービー編集ソフト (Premier等)

音声編集ソフト (SoundEdit等)

オーサリングソフト (Director等)

備考：ハードウェアとソフトウェアの数との関係で、人数は限られる。

上記のソフトウェアはWindows版もMac版もあるが、どちらかを選択する必要がある。

(17)

コース名：技術教育における授業を活性化するためのメディア教材の活用方法（山本利江）

対 象：看護技術教育を行っている教員、入門段階

目 標：授業設計をするときの、学生の思考を触発するメディア教材の選択および活用方法について理解する。

研修時間：1日

研修内容（研修方法）：

- ・授業におけるメディア教材活用の意義（講義）
- ・指導案に基づく授業展開（講義）
- ・授業設計案の作成（実習）

研修評価の観点：

- ・学習者の認知・情動領域に、教材が果たす役割を理解されたか
- ・教育目標を達成するための、メディア教材選択の視点を理解されたか
- ・授業展開において、メディア教材を活用するタイミングと提示の仕方を理解されたか

ラショナル：市販のメディア教材はさまざまあるが、それをどのような規準で選択し、どのように授業で展開するのか、教育学や教員課程を専攻しない教員の場合、個々の教員が独学で行っているのが現状である。この研修プログラムでは、効果的な教材を用いた授業を体験し、授業設計における教材の位置づけを明確にして、今後の授業設計に活用できることを目指している。

参考文献：薄井坦子監修（1990）：モジュール方式による看護方法実習書、第2版、現代社。

備考：ワークショップ形式で実習するので、人数は15名以内。各人が実際に使っているメディア教材を持参するよう伝えることと、それを使える環境が必要。

(18)

コース名：外国語（英語）教育のためのオンラインテスト利用の一形態（吉田信介）

対 象：外国語（英語）教員；Excel、電子メール、統計ソフトの入門知識が必要。

目 標：外国語（英語）の授業において、インターネット上のオンラインテストがどのような形態で利用できるかを理解し、自身の授業のために利用法を計画することができる。

研修時間：3時間

研修内容：研修方法：

<導入> 講義

- *種々のオンラインテストの概要
- *クローズテストについて
- *担当者が開発したCGIオンラインクローズテストの概要

<利用形態> 講義と実習

生徒モード

* CGIオンラインクローズテストへのアクセス

* 画面上で問題に回答後、送信

* 即座に返信される採点結果を画面上で閲覧

教師モード

* 電子メールでホストに回答者情報を送信

* ホストから返信メールに添付された学習履歴の入ったExcelファイルを受信

* Excelを開き、学習者情報（回答者番号、反応時間、得点、入力語句）を閲覧

* 統計ソフト（Statistica）による処理結果より、上下位群別結果、項目分析により学習者のストラテジーを集計・考察

研修評価の観点：

* オンラインテストの利用形態がどれだけ理解されたか。

* CGI、Excel、電子メール、統計ソフトの機能がどれだけ理解されたか。

* それらを学習結果の分析と考察にどのように活用できたか。

ラショナル：クローズテストとは、機械的に文章（英語）の単語をn語ごとに抜いて空白にし、それを埋めさせることにより正解量を測定するものであるが、総合的な語学力（英語力）を測定できる信頼の高い優れたテスト法であるといわれている。このテストは従来Paper & Pencilで行われてきたが、採点には膨大な手間がかかっていた。これをオンライン形式で実行し、電子メールやアプリケーションソフトを活用すれば、即時フィードバックによる採点、学習者の学習履歴の取得、および統計分析結果から、回答者の英語力や読解ストラテジーを比較的容易に解明することができる。また、複数のグループが参加できるため、自分の担当グループの英語力の相対的能力を測定することもできる。

参考文献：

Fotos (1991) "The cloze test as an integrative measure of EFL proficiency:

A substitute for essays of college entrance examinations" Language

Learning 41,3: 313336.

Oller, J.W. (1979) Language tests at school. London: Longman.

参考URL：

ESL Quiz Europe 4 Cloze Test (Michael A. Riccioli)

<http://lapasserelle.com/lm/pagespeciales/europe/europe4.cloze.html>

The Cloze Test. A Tool for Writers. (free software):

<http://144.118.28.211/clozeproze.htm>

The Cloze Program:

www.avp.co.uk/wse98/156.htm

備考：この研修の後に、研修参加者が自分のクラスで使用したい自作のクローズテストをホストに送ると、それがサーバにのせられる。これに生徒が一斉回答し、教師が学習者情報を電子メールで送信すると、採点結果と基本統計処理をほどこした添付ファイルを返信メールとともに受け取ることができる。

なお、ワークショップ形態であるため、人数は20名以内。各人がネットワークコンピュータ

(19)

コース名：マイクロプレゼンテーションのクリニック（保崎則雄）

目 標：マイクロティーチングの方法を参考にして、プレゼンテーション技術だけでなく、内容にあったコミュニケーション、自分に合ったコミュニケーションの形態を認知し、より効果的で、魅力的なプレゼンテーションを身につける。

研修時間：

研修内容：

研修方法：

導入	プレゼンテーションの構成要素を知る	講義と実習
展開	自分の専門分野におけるプレゼンを行なう マイクロプレゼンとして分析し、重点項目に 基づいて、プレゼンを立案 マイクロプレゼンを行ない、相互評価	実習と評価 合評会形式で討議
まとめ	再度プレゼンを行ない、相互評価	合評会形式で討議＞まとめ

マイクロプレゼンでは、質疑応答の方法、まとめかた、導入、補助資料の作成方法、メディアの効果的な利用方法、ノンバーバルコミュニケーションの効果的利用などについて、ポイントを絞り、短いプレゼンを行なう。また、プレゼンは、すべてビデオで撮影し、分析する。

研修評価の観点：最初のプレゼンと比較して、より効果的、魅力的になったかビデオ、互いの評価を参考に改善点をチェックする。

ラショナル：日本人のプレゼンは面白みに欠けるという指摘が今だに存在する。この研修は、その問題を科学的、システムチックに分析し、改善することが狙いである。プレゼンテーションは、コミュニケーションである。映像を使うことも、コンピュータを使用することも魅力的でわかりやすいプレゼンを行なうという点では、十分条件である。しかしながら、まず、きちんと話ができるということは、どのプレゼン（＝コミュニケーション）においても原点である。自分の出す音が会場に反響するということや、映像が聴衆を集中させること、自分の存在そのものがメッセージであるというようなことを理解し、実習できるようになることが、最終目標である。5人に話すときと15人に話すときの違いを体感できる教員が非常に少ないという現実を改善できればいいのではないか。

最終的には、自分のプレゼンスタイルを確立できるようになることである。

Stanford大学でKevin Ryanがいたグループがまとめあげたマイクロティーチングの理論を参考にしてはどうか。

備考：参加者は、きちんと日本語をarticulateすることに関心のある人が15名程というのが限度。WindowsでもMacintoshでも環境はどちらでもよい。要は、何かを意を持って提示できれば、紙1枚でも、身ひとつでも十分である。

(20)

コース名：（外国語）教育のためのビデオ活用の基礎（梅田 泉）

対 象：（外国語）の大学教員（日本語、英語、他）を対象とするが、一般教員も可能。

目 標：ビデオ機器の操作の基本的知識と技術を学ぶことによって、撮影・編集・授業での活用が効果的にできるようになる。（具体的には、1分以内のビデオ資料を作ることができ、それを授業で活用することができる。）

研修時間：配布教材（印刷物とWeb）は自習。

実習を中心とした研修として1日。

研修内容：

研修方法：

1. 外国語教育における画像利用

配布教材による自習

その長所と短所

具体的利用例

ビデオ機材の活用例

2. 撮影の基本

配布教材による自習の後

研修会での実習

3. 編集の基本

配布教材による自習の後

研修会での実習

4. 授業での活用方法

研究会での実習のほか、Web等での授業記録の一般公開、専門分野別によるを含む。

研修評価の観点：配布教材による自習の後、実際にカメラを持ち、編集作業をおこない、授業の中で授業活動を行うことができる。さらに、教材の利用方法を提案する場を設け、現場の教官のアイデアを共有する。

ラショナル：ビデオカメラや編集用パソコンの普及で、だれでも動画を自作できる環境が整って来た。しかし、それを授業に活かすには、基本的な知識と技術が必要になる。また、授業での利用例を出し合うことで、教材制作へのモチベーションを高める。

参考文献：

備考：ハイパーメディアの概念によるプログラムを具体化する。例えば、配布教材はWebの形式で、だれでも、いつでも見られるようにする。

(21)

コース名：プレゼンテーションソフトとしてのブラウザ利用法（梅田 泉）

対 象：教員一般（ワープロが使える人）

目 標：画像資料や、授業の要点をブラウザを使うことによって、提示できる。

研修期間：1日

研修内容：ブラウザソフトの概要（講義）

Netscape Composerの使い方

（実習）

画像データの作成法

（実習）

研修評価の観点：ブラウザはホームページを見るだけの道具ではなく、授業における情報の提示にも活用できることを理解する。

ブラウザを使って簡単なプレゼンテーションができる。

ラショナル：

備考：

(22)

コース名：コミュニケーションとしての大学授業デザインの改善（市川 昌）

対象：一般教員、特に大学教育経験の浅い教員のための授業デザイン研究が目的。パソコン導入を含むメディア活用による授業方法改善の小集団討議と実習。

目標：大学の大量化にともなう学生の多様化に対応して、大学における授業研究の必要性とともに、インターネットを含む各種情報機器の活用による授業デザインの改善が求められている。この研修は教員と学生が双方向のチャンネルを確保しつつ、伝統的な講義法を改善できるか—各自の教育実践を踏まえながらシラバス研究、小集団討議、ミニ授業モデル、インターネット交流、授業評価システムなどのワークショップを実施して授業デザイン改善の方向を自己発見することを目的とする。

研修時間：3日程度（午前講義、授業モデル研究、午後 実習、討論、見学など）

研修内容：

- 1) 大学の講義が一方交通の情報提供作用に終始しがちな状況を反省し、メディアリテラシーの教育、双方向コミュニケーションのための授業デザインの構築について研究討議する。
- 2) 学生の興味、関心の多様化に対応したカリキュラムの構造化の方法を研究し、シラバスの記述の仕方、授業内容、方法の吟味を行う。
- 3) ミニ授業モデルをもとに、学習者の動機づけ、質疑応答、参加意欲と報奨、テストと評価、授業案の改善などについて実践的に研究する。
- 4) OHP、実物投影、VTRなどの視聴覚機器の活用法とともに、パソコンによるCD-ROM、インターネット検索、インターネット通信、Eメールの活用法など新しい情報教育について実習する。
- 5) Virtual University, Distance Education System, SCS(Space Collaboration System), Date BaseなどのNIMEの事業、放送大学教材制作についての見学、参加研修などを実施する。

研修評価の観点：大学教員として多様化する学生たちのニーズに対応して、授業シラバスを改善し双方向性を意識した授業デザインを各自実施する契機とする。

ラショナル：各大学などのコンピュータ・ネットワークのハード面が次第に整備されつつある。ソフト面でも各大学ごとに情報系教員を中心にパソコン操作のための一般教員の研修が実施されているが授業デザイン研修はない。しかし多くの大学の授業法は依然として黒板を背にした口頭伝達による講義スタイルが中心の一方交通コミュニケーションが主体で、学生の評判も悪い。この原因のひとつは、教職経験の浅い教員が授業法に関する知識技能の全く無いまま—

般教養や専門基礎の多人数講義を担当しているため、教員達は機会があれば授業デザインや双方向コミュニケーションの授業研究研修に参加することを希望している。高齢職員、文系教職員のための情報リフレッシュメントも同様であり、インターネットやパソコン以前にどのように授業を現代化するのか基礎的理解なしに、技術操作のみ伝達しても効果がない。このワークショップは比較的少人数で小集団討議、ミニ授業モデルを重ねながら自分の授業を素材に分析しよりよい授業デザインを構築するための導入研修でありたい。

参考文献：ロンドン大学教育研究所（University of London, Teaching Methods Unit,1976）著、喜多村一之ほか訳、大学教授法入門（Improving Teaching in Higher Education）玉川大学出版部 Sharon Gray（Sioux City ,USA, 1998）Maintaining Academic Integrity in WebBased Interaction, Educational Media International ICEM, Routledge, NY Alain Chaptal（Paris,France,1998）New and Traditional Media; How to Choose Between Them Teachers Choose, Educational Media International ICEM, Routledge NY

備考：現在の『教員のメディア活用能力を向上させるための研修プログラムの研究開発』共同研究者を中心に講師陣を組み、NIMEおよび放送大学のスタジオ収録、SCSなどによる遠隔授業などについても体験、見学させる機会をもちたい。参加は30人程度。パソコンでは授業素材のインターネット入力、インターネット授業、Eメール添削などを経験させたい。

「注」ID（Instructional Design）を教授デザインよりわかりやすい授業デザインとした。

(23)

コース名：授業のための遠隔双方向性コミュニケーション研修（本郷 健）

対象：教員一般

目標：大学等のネットワークを利用した授業において、指導者と受講者あるいは受講者間の双方向コミュニケーションを実現する具体的な方法について体験し、自らの授業での活用を計画する。

研修時間：1日

研修内容：

研修方法：

導入（講義）

講義

- ・ネットワークの概要
- ・双方向コミュニケーション技術の現状と課題

利用形態

演習

- ・電子メールによるレポート出題と提出
- ・回収したレポートの管理
- ・レポート閲覧
- ・フォームを使った双方向WWWの利用
- ・チャット
- ・ホワイトボード

研修評価の観点：

- ・メールを授業の双方向コミュニケーションの道具として利用することができる。
- ・双方向性を持つWWWを作成することができる。
- ・チャット、ホワイトボード、音声、画像等のインターネットを利用した双方向コミュニケーションの現状が把握できる。

授業でネットワーク環境を利用しようとする場合、学生と教員あるいは学生間での双方向のコミュニケーションをどのように実現していくかが重要な鍵となる。レポート出題や回収を電子メールにより行う場合やWWWを利用して行う場合の利点や問題点、またその改善事例などを知る。

双方向性を持つWWWは授業などのレポート提出に欠くことができない技法である。こうしたコミュニケーション作成技法を演習を通して体得すると共に、その他の双方向コミュニケーション技術の現状を知ることによって、自身の授業のために利用することができることを目指す。

(24)

コース名：遠隔教育のためのトレーニング (立田ルミ)

対 象：遠隔教育に興味のある一般の教員

目 標：遠隔教育に必要な装置とビデオ作成

研修時間：2日間

研修内容：

研修方法：

導入

- ・遠隔教育の概要
- ・遠隔教育で必要なこと

講義

利用形態

- ・シナリオ作成
- ・装置の準備
- ・テレビカメラを操作してみる
- ・テレビカメラで数分の授業を行う
- ・ビデオを見て、授業の悪い点、よい点を討議する
- ・シナリオ修正
- ・テレビカメラで再度授業を行う

ワークショップ

利用計画の立案

- ・遠隔授業の計画
- ・シナリオの作成
- ・テレビカメラで授業を行う
- ・視聴者の意見

研修評価の観点：

- ・遠隔教育をどのように進めてゆくか

- ・どのように授業を進めてゆけばよいか
- ・視聴者がどのように評価するか

ラショナル：アメリカの大学では最近遠隔授業を行っているところが増えてきている。日本でも文部省が1998年3月に大学設置基準を改定して、高等機関におけるマルチメディアを活用した遠隔授業の単位認定を可能にする制度整備を行っている。これにより、テレビカメラに向かって授業を行う必要性も増えてくるものと思われる。そこで、テレビカメラに向かって授業を行い、視聴者とのディスカッションを行うことにより、よりよい遠隔授業が行えることを目的としてこのワークショップ開催する

備考：この研修は、機器の関係からメディア教育開発センターで行う

(25)

コース名：大学授業への映画の利用（米谷 淳）

対 象：一般教育担当者、メディアメーカ派遣研究員

目 標：非専門の学生を対象とする一般教育を、学生の好奇心をひきつけ、インパクトのあるものにするための映画活用の方法を学ぶ

研修時間：90分×10回

研修内容：

- ・実際に授業で映画を利用している大学教員が、映画を上映しながら、授業への活用について説明し、討議する。
- ・各領域で大学教育に利用できる映画（映像ソース）の所存やアクセス法、利用上の問題を検討する。
- ・参加者各自が自分の担当科目に映画を使用するデザインを立案し、実施上の注意点について経験者からアドバイスを受ける。

研修方法：

- ・模擬授業と討議
- ・専門家、識者からの情報提供とQ & A
- ・授業デザイン演習とリハーサル
- ・小グループによる参加体験型の講習とする

研修評価の観点：

- ・大学教育への映画活用の意義・方法・問題を理解する。
- ・映画を授業に利用するための諸問題についての情報を得る。
- ・一般教育への動機づけの工夫ができるようになる。
- ・実際に自分の授業に映画教材をとり入れられるようになる。

ラショナル：興味ある教材を多用した一般教育をつくりあげるためには、TV、映画など学生が日常目にしているメディアをとり入れたカレントなトピックスの豊富な授業とする必要がある。このための方法と問題点の検討はこれまであまり組織的になされていない。

備考：“映画祭”のような形式の講習会を想定したい。

(26)

コース名：大学教育における目的利用のためのメディア機能の拡張（渡邊光雄）

対 象：大学一般教員

目 標：大学教育におけるメディア機能拡張によるメディア利用のあり方について理解する

研修時間：6時間

研修内容：

1. 大学教育における専門分野の目的利用
2. 目的利用におけるメディア機能
3. 既製メディアの機能拡張の可能性
4. メディア機能の拡張プログラム例
5. 目的利用とメディア機能拡張の事例
6. 専門教育におけるメディア利用

研修方法：

- (講義)
(講義)
(講義)
(演習)
(演習)
(講義)

研修評価の観点：自らの専門分野の教育目標を満たすために必要なメディア機能拡張を提案できること。

ラショナル：大学の専門分野でメディアを利用するとき、一般教員（メディア工学専門家以外）にとって、専門教育の目標に合わせたメディア利用を考えることができず、既製メディアの機能に合わせた利用を考えざるを得ない。大学教員は、自らの専門分野の教育目標を実現するためのメディア利用を行わなければならない。このことに対する大学教員の自覚を高めるために、本研修プログラムは必要となる。

(27)

コース名：コンピューターで編集できるビデオ教材（谷口初美）

対 象：教員一般

目 標：自分で録画したビデオに注釈の文字を入れたりする編集をして時間内の教育を作製することができる。

研修時間：1日～2日

研修内容：

- 導入：教材のコンテンツ
内容：ビデオの撮影技術の基本
編集方法
ビデオ教材の授業への取り組み

研修方法：

- 講義
講義
実技演習

研修評価の観点：

- ・ビデオ撮影の基本的技術が理解できる。
- ・教材のコンテンツの原理が理解できる。
- ・コンピューターによる編集技術を習得できる。
- ・教室での有効利用方法が習得できる。

ラショナル：教育の中でも取り分け医学教育、看護教育は動画による学習教育が必要とされる。しかし、既製の教育ビデオは数少なく、また、授業内容に合わない点も出てくる。そこで、教科に合った教材の必要性が要求される。

そこで、この研修プログラムでは、これからの教授活動にビデオ教材を利用しようとする教員に対して、ビデオ教材の利用価値を見出し、オリジナルの教材作成をすることでファークルティデベロップメントと学生の学習に対するモチベーションを向上させる方法を提供する。

(28)

コース名：教育メディア利用に関する問題解決にむけて（久保田賢一）

対 象：教育関係者全般、特に大学教育に焦点を当てても良い

目 標：教育メディア利用に関わる問題を抱えている教員に対して、適切なアドバイスをしたり、セットアップのための支援、さらにはオンザジョブで研修を行う。

研修時間：1日から1年

研修内容：

参加者のニーズに合った研修を行うため、ここには具体的な研修のコンテンツについては記述できない。たとえば次のようなコンテンツが考えられる。

- *サーバーの立ち上げに必要なハード、ソフトの紹介とセットアップの手順について学ぶ。
- *マルチメディア教材作成に必要なハード、ソフトの紹介と実際に製作するための実習を行う。
- *インターネットを活用した情報収集と発進について、実習する。
- *その他、参加者のニーズを吸い上げてそれにあった研修を作っていく。継続的に参加者と対話しながらコンテンツを作っていくことが求められる。

研修方法：メディア教育開発センターのサーバーに、教育メディア研修に関する掲示板を立ち上げ、研修や支援の必要な教員からのニーズや支援要請を受け付ける。一方、ボランティアとして支援可能な教員、学生から支援できる内容と日程を受付、支援を希望している人とボランティアのマッチングをする。ボランティアは相手のニーズを調査し、できたら一回限りの研修でなく、コンサルテーションを含む、長期的な支援活動を行う。

研修評価の観点：参加者からの反応とボランティアの報告書により判断をする。

ラショナル：FDの考え方や教育メディアの利用ということについて、まだ一般の教員は関心が薄いと思います。研修プログラムはそのような教員をターゲットにしても、現在の状況では効果も少ないし、たぶん研修に参加しようなどとは考えないのではないのでしょうか。それよりもコンピュータについてもっと勉強をしたいという教員をターゲットにした方が効果も上がるし、实际的だと思います。そういう教員は、今現在、コンピュータに関して具体的な問題を持っており、それを解決するための支援を必要としています。しかし、そのような問題は多様であり、「ウィンドウの使い方」といった一般の研修カリキュラムでは対応が難しいでしょう。それぞれがユニークであるため、研修内容を事前に決めるというよりも、参加者と対話をしながら研修を進めていくスタイルをとる必要があります。

アメリカには学校や図書館、非営利団体を支援するNPOで「コンピュメンター」という組織があります。このNPOは、コンピュータに関することで問題を抱えているこれらの組織へボランティアを派遣して支援を行っています。ボランティアは前もってコンピュサーブにネットを通じて、自分の得意分野と活動できる曜日を登録をしておきます。支援を必要とする学校や非営利団体から連絡を受けると適当なボランティアと連絡を取り派遣するということをやっています。

このとき単に壊れたところを修理する、使い方を教えるといったクイック・フィックス的なやり方ではなく、長期的にその組織にどのような研修が必要で、どのようなシステムを構築していくべきか相談にのれるボランティアを派遣するようにしているそうです。

システムとして正式にFDが大学のなかに定着するにはまだ長い時間がかかります。それよりも今はコンピュメンターのような支援組織を作り、支援できる人と支援を必要としている人とのマッチングをできるようにすることで、「いま」、「ここ」の問題点を解決していくことが重要なのではないのでしょうか。

そこで提案があります。メディア教育開発センターが、コンピュメンターのような役割を担うことができないだろうかということです。センターのウェブページにボランティアの募集と問題相談室を設けて、ボランティアを登録して派遣することです。たぶん、有償ボランティアの方が実際に運用しやすいと思います。私自身がボランティアになることはできませんが、私のところの学生にはコンピュータに強い学生から、ビデオ制作に強い学生までたくさんいます。また、機材もありますから、それらを利用することもできます。彼らにとって、ボランティアとしてお手伝いすることは勉強になりますし、いくらかの収入にもなります。または、工学部の学生ならばコンピュータについてたいいていのはできると思うので、ぜひ参加してもらったらよいと思います。

(29)

コース名：事例研究：マルチメディアで何ができるか？（山本和明）

対 象：教員一般、入門段階

目 標：マルチメディア教材を制作するには、まずマルチメディアで何ができるか、どんな表現が可能か理解する必要がある。CDROMやWebサイトの事例を見ながら、マルチメディアの表現能力を理解し、マルチメディア教材の企画ができるようにする。

研修時間：1日

研修内容：

研修方法：

導入

講義

・マルチメディアとは？

事例研究

講義と実習

1) ビデオ：マルチメディアの事例

2) CDROMによるマルチメディア（パッケージメディア）

3) Webによるマルチメディア

4) マルチメディア教材を制作するには：教材の企画

研修評価の観点：

- ・マルチメディアの代表例：CDROM及びWebサイト
- ・マルチメディア教材の企画

ラショナル：マルチメディアのかけ声は大きいものの、マルチメディア教材制作には多くの障害が横たわっている。その中でももっとも大きな問題は、マルチメディアという言葉の浸透とうらはらに、すぐれたマルチメディア教材が非常に乏しいため、ほとんどマルチメディアで何ができるか、理解されていない。

そこで、CDROMパッケージの代表的な事例を紹介することによって、どんな教材が制作できるか、考える材料と枠組みを提供する。

また、インターネット、Webを使ったマルチメディア教材の代表的なサイトを紹介し、Web上のマルチメディアで何ができるかを考える材料と枠組みを提供する。

最後に、授業において、CDROMとWebを使って、どんなマルチメディア教材を作れるか、企画構想にチャレンジする。

参考文献：山本和明：マルチメディアとは何か、マルチメディア出版研究会

参考URL：<http://ia52501.ia.inf.shizuoka.ac.jp/References/CD/Index.html>

<http://ia52501.ia.inf.shizuoka.ac.jp/References/IN/Index.html>

<http://ia52501.ia.inf.shizuoka.ac.jp/References/VD/Index.html>

備考：

ワークショップ形態になるので、人数は20名以内。

CDROMを使って提示するために、CDROMドライブ付きで、16ビット以上のカラーが使えるマシンで、プロジェクト出力できること。また、ビデオをプロジェクトに出力できること。

Windows環境またはMacintosh環境で、各人が個別にWebブラウザを使ってネットサーフィンができること。

(30)

コース名：教育メディア活動の総合評価 (原 一雄)

対 象：教育メディア関連の教職員

目 標：それぞれの大学において教育メディア活動の実態を先ず関係部局が自己点検し、次に学内において相互点検し、最終には第三者による他者評価を受けるための総合的評価活動のガイドラインを開発する。

研修時間：1～1.5日

研修内容：

研修方法：

1. オリエンテーション「大学の自己点検評価の意義と効用」 講義
個別大学並びに大学基準協会等による評価活動の中での教育メディアの位置づけを行い 本研修との関連性を理解させる。

2. 領域分野別評価項目の選択

グループ学習

カリキュラム、人的資源、施設設備、予算等の各方面において、授業担当者、支援スタッフ、行政職員の立場から、点検評価用の項目グループを作成する。

3. 総合的評価の試案

合同演習

各評価者グループから得られたデータに因子分析、パス解析等の統計処理を施し、分かり易く表示する方法を工夫する。

研修評価の観点：

どれほど教育メディア活動を公正且つ客観的な評価の対象とすることができるか。

どこまで教育メディア活動を大学における自己点検評価の中に組込めるか。

ラシヨナル：大学設置基準の大綱化以来、種々の自己点検評価方法が実施されてきたが、教育メディアに関しても、具体的なデータを基にしてより一層厳正な評価を行い、将来の発展に資する方途を開発しなければならない。

(31)

コース名：教育メディアのシステム開発と経営ワークショップ（原 一雄）

対 象：情報科学関連の教員（および職員・行政職・業界代表）

目 標：それぞれの大学における教育・研究・社会活動に適ったメディアの利用法を考案するため、短・中・長期システム開発計画を策定する基礎訓練を行う

研修時間：1～1.5日

研修内容：

研修方法：

1. オリエンテーション「教育メディアの今後の役割」

講義

2. 事例発表「わが大学の情報システム開発計画」

講義

（例：大／中／小規模大学、教養教育、専門研究重視型）

3. 試案の共同策定

グループ演習

計画案の策定に必要な基本的要素（目標、予算、施設、人的資源等）を抽出し、仮想条件の下で具体的な計画案を試作する

4. グループ試案の発表

全体討議

各グループの試案につき参加者が自由に質疑する

5. 参加者別の計画案作成

所属大学の特殊性を生かした教育メディア促進計画を作成する

研修評価の観点：あくまでも所属大学固有の目標に照らして、冷静に現状を分析し、将来に向けて具体的な計画が策定できる識見と方策が学習できたか

ラシヨナル：ハード面の技術改革に沿って、ソフト面も絶えず改善されなければならない。しかし、個人の知識や経験には偏りや限界があるので、大学は組織的継続的に教育メディアの現状を点検評価し、大局的な視点から総合的に将来計画を立てることのできる人材を養成しなければならない

備考：上記に作業にはメディアの利用による教育効果と研究成果の評価基準を設けること、また、教育メディアに対する投資の優先順位を決める原則をうち立てること等が肝要と思われるので、他の研修プログラムと協力する必要がある

(32)

コース名：授業計画の立て方 (原 一雄)

対象：教職科目担当教員並びに大学院生 (TA)

目標：授業計画において教育メディアを存分に活用し、更にそれを常時改善するための基本的技法を学ぶ。

研修時間：1日

研修内容：

研修方法：

1. 授業案フローチャートの作成

講義と演習

授業設定の基本理論とモデル授業 (ビデオ録画) の分析

2. 各種メディアの利点と欠点

講義

3. メディア教材へのアクセスと選択の方法

演習

4. メディア教材による学習効果の評価

講義と演習

教員／生徒・学生の立場から

学習意欲／学力／社会性の面から

研修評価の観点：

多様な授業形態を設計することができるか。

多くの種類のメディアを利用する方法に熟達したか。

学習目的に応じてメディア教材を適切に選択できるか。

ラショナル：初等・中等教育の現場におけるメディアの導入には大きな幅があり、教職課程の担当教員はその実態に必ずしも詳しくない。また、履修性に対して教育実習前に実践的訓練を施すことは極めて困難である。そこで、教育現場にメディアが導入されている場合には如何に対応すべきか、最低限の知識と技術を備えて教員養成に当たらなければならない。

備考：講師として是非とも新潟大学の生田孝至氏にお願いを申し上げたい。

(33)

コース名：研究発表にすぐ役立つパソコン活用

一予稿作成からプレゼンテーションまで一

(玉田和恵)

対象：一般教員

目標：パーソナルコンピュータの各機能と自分が実現したい身近な処理を結びつけることによって、自己の目的に適合したメディア機器の利用方法を発想できるようにする。メディア機器に対するアレルギーを取り除く。

研修時間：2日

研修内容：

研修方法：

1. ワードプロソフト利用による魅力的な学会予稿の作成 実習
 - ・書式の設定（学会指定の様式）
 - ・入力
 - ・スキャナやデジタルカメラを利用して資料を電子化し文書に貼り付ける
 - ・グラフや図などを作成し、文書に貼り付ける
2. プレゼンテーションソフト利用による発表資料の作成 実習
 - ・ワードプロソフトで作成した学会予稿をもとにプレゼンテーションソフトでデータを加工する
3. プレゼンテーションの実施 実習
 - 実際の場面を想定して、OHP、ビデオプロジェクタなどを使用し、各受講者が発表を行い、意見を交換する

研修評価の観点：

- ・ワードプロソフトを利用したDTP作業を通じて、情報を表現することの楽しさを味わうことができたか。
- ・プレゼンテーションソフトを利用して、効果的なプレゼンテーションを行うことができたか。
- ・自己の目的に適合したのメディア機器の利用方法を発想することができるようになったか。

ラショナル：高等教育の授業改善のためのメディア活用が叫ばれているが、これについて一般教員の知識は高いとは言えない。筆者の所属機関でアンケートを実施したところ、「メディアとはどんなもののことを言っているのかよく分からない」という回答が多く寄せられた。メディア活用を推進するためには、自分の活動のどのような部分に活用することができるのか。活用したらどのように自分の教育や研究が便利になるのか。具体的な事例を実践することによって、動機づけを行い、メディア活用の範囲を広げていく必要がある。

備考：受講者は、自分がこれから学会発表を予定している予稿の原稿・原稿に貼り付けたい図、写真・執筆要領・発表のための資料などを持参する。

個別実習を行うため参加人数は20名程度。受講者のレベルに合わせてアシスタントが2、3名必要。入力の遅い受講者なども多くいると思うので、講師やアシスタントは入力を代行する覚悟でのぞむ。とにかく、最終的に学会予稿とプレゼンテーション資料を完成させ、受講者が満足して、帰る時に「よしこれからも、メディアを活用して頑張るぞ。今度はぜひ授業にも活用してみよう」という気持ちになっていただければ大成功。

(34)

コース名：大学の教授学習理論とメディア・コミュニケーション形態（菅井勝雄）

対象：大学教育、一般、初級レベル

目標：総論・基礎論、今日の情報化社会における大学教育のあり方を考え、具体的にどう

改善すればよいかを考える

研修時間：2日間 初日（講義） 2日目（午前・実習、午後・討論）

研修内容：

研修方法：

1. 講義 「コミュニケーション学」の観点から、メディア・コミュニケーション形態のもとに情報化社会および大学教育の位置付けを試みる
2. 講義 大学における教育方法、講義法、ゼミ、実験実習、個人指導などの教授学習理論を概説し、その相互関連のもとに、どのようにメディアを利用して改善しているかを例示することに努める
3. 実習 受講者がそれぞれの大学における教育で、どのように教育方法を改善すればよいか、改善案を作成する
4. 討論 それぞれの改善案を発表し、討論しあう

(35)

コース名：インターネットによる実験実習の公開授業への参加 （菅井勝雄）

対象：中級、大学教育

目標：大学における実験実習の授業をインターネット上で公開し、それに受講者が参加し、討議したり評価したりする

研修時間：半日

研修内容：

研修方法：

これは、これから研究として始める予定なので、詳細は今後の進展による

(36)

コース名：Development of Student Skills in the Information Age

Madhumita Bhattacharya

My proposal for a short term course for faculty and students for the development of study skills.

Title: "Development of Study Skills in the Information Age"

The material would be web based and interactive for students to develop certain skills essential for study and research. Similarly will be for the faculty.

Objectives:

On completion of this course the students and the faculty would be able to:

- * state the need for developing study skills in higher education
- * identify the ingredients of study skills
- * state some of the methods for inculcating study skills
- * relate models of teaching and theories of learning as per intended activities.

Rationale:

You are no doubt aware of the fact that there is a marked difference between the school and

university in respect of academic freedom, choice of courses, hours of study and even attendance in the classroom. much more is left to the initiative of the student. The transition from school to university and lifelong preparation of students should take care of the following factors:

- * Independent learning and thinking
- * Organisation of activities and the time management
- * Taking care of increased reading load
- * Note taking in lecture classes and from books, journals, etc. and making study notes
- * Coping with tests
- * Preparing for examinations etc.

As at present, there is no formal method of educating the students 'How to Study?' Therefore, we propose a web based interactive material for both faculty and students.

Duration:

One week with a lot of activities and assignments

(37)

コース名：マルチメディア入門 (1) 教材制作 (棕代惟親)

対 象：教員一般 (OHP、ビデオ教材自作経験者対象)

目 標：

- ①マルチメディアの概念
- ②システムの概要
- ③メディアミックスと教材〈知的財産権含む〉、開発、活用にかかわる教材理解。
《・低分子型（単一コンセプト、単純構造）教材、・中分子型（学校放送番組型・中間構造）教材、・高分子型教材（NHK特集番組的）高度構造化教材等》
- ④マルチメディアシステム、ノンリニア編集システムの操作に慣れ親しむ。
- ⑤教材番組制作（演習）：演習を通じて、教材開発への興味関心を高め、自信を深める。

研修時間：3日 () () ()

研修内容：自作アニメ、現地撮影の写真・ビデオ、ダウンロード素材等...

研修方法：

- ①マルチメディアの概念とハード開発普及状況と展望、教育の動向〈90分〉講義・演示
- ②システム構成と機能特性と限界、活用事例とシステム活用の教育上の留意点
- ③システム接続実習、操作練習、電源オンから編集操作＞電源オフ〈90分〉講義・実習
- ④教材の構造と活用意義、特に教授型授業と総合的学習等への効果〈90分〉講義・実習
- ⑤教材開発計画（目的、内容、構造、素材、収集・撮影計画等）〈90分〉講義・実習
- ⑥教材開発 ①準備作業②素材収集③撮影④編集作業〈360分〉講義・実習
- ⑦作品評価・鑑賞、相互評価・批評討議〈180分〉作品評価討議会
(自己評価ならびに教材制作の教育的意義の確認と反省)

***留意事項:**

- ①研修参加前、準備物等について予告が必要である場合も起こり得る。
- ②作業の進捗状況によって、場合によっては研修内容5～6と6～7それぞれの間にグループ自主活動自由時間を与え、各グループの進捗状況・時間の調整を図る。

研修評価の観点:

- ①参加者の経験の有無と深さ/関心、意欲...などの変容効果
- ②システム構成の理解、接続作業ならびに操作の習熟度効果
- ③制作目的に向かって、コンテンツ構成や効果的表現など知の総合的統合活用能力向上を得し、発揮できたか（実践的転移力のある構造的認識に到達したか）
- ④メディア特性や限界の理解と活用選択の的確性は
- ⑤メディアミックス理解〈新しい価値創造〉はできたか
- ⑥各成員は個性と創造性を発揮して充実感のある協働ができたか
- ⑦成員相互の人間理解（新しい自他の素晴らしさ発見・敬愛関係）、連帯関係構築は
- ⑧制作目的の教科・領域などに関する専門的理解・精通は、飛躍的深化発展したか
- ⑨「授業（模擬）」にて活用、制作目的に相応しい期待した効果が得られたか

ラショナル:教材制作能力は、魅力ある授業遂行能力の一つの要件である

- ①マルチメディア、インターネットの活用は、子どもの21世紀を生きる力育成である。
- ②教材への精通、メディア・情報リテラシー、教育コミュニケーション能力形成に役立つ。
- ③自作教材・マルチメディア教材開発・活用、学校文化創造の指導に自信を持つ。
- ④広く世界の情報を生きた教材とし、学習者の視野・世界観・行き方を深化発展活性化する。

備考:①授業実践による効果の検証

- ②インターネット活用作品・効果情報交流と評価

(38)

コース名:情報倫理教育入門（玉田和恵）

対 象:一般教員

目 標:インターネット等の情報通信網上での個人の意志に基づく情報発信・受信に関わる諸活動での規範や評価基準を身につける。

研修時間:1日

研修内容:

1. 教育に関する情報倫理の問題
2. 事例研究
 - ・セキュリティ
 - ・プライバシー
 - ・知的財産権
 - ・有害情報

研修方法:

講義と討論

研修評価の観点：

- ・ 情報アクセスに関して、現在起こりうる諸問題について理解する。
- ・ 情報アクセスに関する規範や評価基準について考える。
- ・ 情報倫理に反する行為を学生が行った場合、どのような指導が可能かについて考える

ラショナル：社会の情報化はこれまでに経験したことのない様々な問題を生じさせている。これらの諸問題を解決するためには、学生に対して、インターネット等の情報通信網上での個人の意志に基づく情報発信・受信に関する規範、善し悪しの見極め基準を育成する必要がある。新たな事態、新たな問題に対しても自己の倫理観に基づく判断ができるよう、情報に関する健全な倫理観を育成するためには、教員がまず正しい認識を持つ必要がある。

この研修では、具体的事例を素材にしつつ、教員同士が討論を行い、情報倫理に関する指導法について検討し、お互いの意識を深めることを目指す。
